鹿児島カトリック教区報

〒892-0841
鹿児島市照国町13-42
カトリック鹿児島司教区
電話099（226）5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行　教区広報部
1部60円年間〒共1100円

道　標

教皇フランシスコの遺産

鹿児島教区司教　**中野裕明**

教区の皆さま、お元気でしょうか。わたしたちは、今年の復活節に教皇フランシスコを失い、教皇レオ14世を頂きました。教会の胎動を感じる貴重な時間を過ごしています。

そこで今回は、忘れ去られそうになりがちな「教皇フランシスコの遺産」についてお話しします。話の視点は、教会内と教会外に対してです。

教会内に対して

教皇フランシスコは、第2バチカン公会議（1962～1965）の決定を忠実に実践なさいました。それは2年にわたって開催されたシノドスのスタイルについて特に言えます。

シノドス（世界代表司教会議）は第2バチカン公会議後2～3年ごとに開かれていた教皇の諮問会議です。15回までは、各国の司教協議会からの代表がローマで議論し、教皇への提言をまとめていました。その後教皇は、その提言を基にして、「使徒的勧告」という文書を発布して、シノドスの結論にしていました。

ところが、教皇フランシスコは、信徒一人ひとりの声を吸い上げ、教区ごと、国ごと、地域ごとにまとめ、最後のローマでの最終会議には、各国の代表として司教、司祭、奉献生活者、信徒を参加させました。しかもその会議は2年にわたりました。

このやり方は別として、その教義学上の根拠は、『教会憲章』第2章「神の民について」12番にあります。「神の聖なる民は、キリストが果たした預言職にも参加する。（中略）聖なる方から油を注がれた信者の総体は信仰において誤ることができない。この特性は、『司教をはじめとしてすべての信徒を含む』信者の総体が、信仰と道徳のことがらについて全面的に賛同するとき、神の民全体の超自然的な信仰の感覚を通して現れる。（中略）聖なる民は、聖なる教導職の指導のもと、これに忠実に従い、もはや人間のことばではなく、真に神のことばを受け入れる」。

この第2章「神の民について」が第3章「教会の位階的構成、とくに司教職について」の後にではなく、その前に置かれていることは注目すべき点です。それは、教会に巣くう聖職者中心主義の緩和に役立っていると思います。

ただ注意すべきは、このようなシノドスのスタイルが、教会があたかも自由と民主主義を採用するようになったと誤解される恐れがある点です。公文書の意図はそうではありません。

教会外に対して

教皇は、回勅『ラウダート・シーともに暮らす家を大切に』を2015年5月24日に発布なさいました。

この回勅の主旨は、被造界を大切にすることによって天地万物の創造主である神を賛美する、アシジのフランシスコの「太陽の賛歌」の精神を現代人に思い起こさせるという点にあったと思います。その意味で、科学技術の発展を肯定しながらも、それに溺れて開発を無限に進めることは創造主の意思に反し、人間の尊厳を失い、地球を破壊しかねないから気を付けるようにとの警告だったはずです。しかしその内容が同じ年の9月の国連総会で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）に援用されたような格好になり、神への信仰抜きの警告に格下げされてしまったのは残念でした。

すなわち、科学技術の発展に期待するあまり、回勅を丹念に読むことにより浮かび上がる人間の尊厳や創造主への依頼心といったことがらへの関心が薄まり、気候変動や地球環境問題を単なる科学技術や政治の問題として捉えられてしまったこと、また人間自体が内包している人祖アダムとエヴァの罪との関係という信仰上の議論がなかなか行われなかったことは残念なことです。

ただ、地球環境問題に教会を注目させたことは、19世紀以降、対立関係になっている科学と宗教（信仰）の相反関係に終止符を打ち、両者間に調和をもたらすよう促していると捉えることができます。

実際、教皇は回勅の中で、第2バチカン公会議以前、信仰上の危険思想として退けられていたテイヤール・ド・シャルダン神父（イエズス会士　古生物学者　思想家　1881～1955）の説を取り入れています。

まとめ

一般に、人の評価はその死後になされます。わたしは個人的に、教皇フランシスコは、キリストの福音に忠実であった聖なる教皇であったし、神学的にも間違ってはいなかったと思います。

新しいパパ様に教皇レオ14世

教皇フランシスコの逝去に伴い実施された教皇選挙でロバート・フランシス・プレヴォスト枢機卿が選ばれ、教皇レオ14世を名乗ることとなった。

新教皇はシカゴに生まれの69歳。1977年、聖アウグスチノ修道会に入会し、1981年に終生誓願を宣立。1982年6月19日、司祭に叙階された。2001年9月総長に選出される。その後は2015年9月26日にチクラヨ（ペルー）司教、2023年1月30日に教皇庁司教省長官、同年枢機卿になっていた。

©Vatican Media

教皇フランシスコ 役目を終えられ帰天

4月23日、教区で追悼ミサ

教皇フランシスコが4月21日（月）午前7時35分（日本時間14時35分）、父なる神のみもとに帰られた。教皇在位12年、88歳だった。「パパ様帰天」の知らせを受けて、教区では4月23日（水）夜、鹿児島カテドラル・ザビエル教会で追悼ミサをささげた。

追悼ミサ

18時から始められた追悼ミサには180人を超える信者が駆けつけ、中野裕明司教とともに教皇フランシスコの死を悼むとともに、全力でその使命を果たされた教皇の永遠の安息を祈った。共同司式のために11人の司祭が駆けつけた。

また「主の復活の8日間」には葬儀ミサも死者のためのミサも禁止されているため、中野司教はカテドラルでの追悼ミサに参列できない信者のことを配慮し「主の復活の8日間中でもフランシスコ教皇の永遠の安息を祈る追悼ミサをささげる許可」を教区で働くすべての司祭に通達した。

貴島神父によってなされた福音朗読後に説教した中野司教は、亡くなる前日（復活祭）にバチカンに集まった信者の前に顔を出された教皇の様子を報告した後、復活祭の翌日がイタリアでは「天使の日」と呼ばれ、この日に神のもとに旅立ったことに不思議を感じるとし、概ね次のように説教した。

14億人とも言われるカトリックの最高指導者であっただけでなく、バチカン市国の首長でもあった教皇は在位中、信者の信仰の質を高めるために全力で働き、また各国の政治家たちにも平和実現のために自らの言葉と行いで諭しを与えた。教皇の帰天にはもちろん悲しみもあるが、心から「ご苦労さま」と申し上げたい。フランシスコ教皇は、人々に寄り添う方だった。聖年開始にあたっては、真っ先に刑務所に足を運び受刑者たちを励ました。まさに免償がいただける聖年にふさわしい行動だった思う。そんな教皇が大切にしたのはやはり福音宣教。聖霊の働きを信じ、教皇フランシスコの思いを受け継いでいこう。

説教後の共同祈願では、教皇の永遠の安息と鹿児島教区が教皇を模範として外に出ていく姿を実現し、また希望の巡礼者として聖年を歩むことができるよう祈りがささげられた。またミサの終わりには、ヨハネの黙示が朗読された後、教皇フランシスコの永遠の安息が祈られた。

司祭評議員決まる

5月1日付けで発表された司祭評議員は以下の通り。任期は2年。敬称略。

会長 中野裕明（教区長）、副会長 泉浩二（総代理）、評議員 栃尾泰英（奄美地区長）、霧島彬（事務局長）、貴島丈弥、李秉徳（以上、教区司祭団選出・本土）、朴昶奎（教区司祭団選出・奄美）、盛克志、石田望（以上、レデンプトール会選出）、ジュセッペ・サンタマリア（ザベリオ宣教会）、金熙一（コンベンツアル会選出）、鈴木康由（司教指名）。

教皇フランシスコが残したもの

―著された主な公文書から―

資料提供　カトリック中央協議会

2013年3月の就任以来、教皇フランシスコは、祭儀や行事での説教や講話、教書、70にも上る国々の司牧訪問、あるいはビデオメッセージやソーシャルメディアの使用などによって、世界に向けた訴えかけを続けてきました。またヨハネ23世教皇、ヨハネ・パウロ2世教皇、マザーテレサを列聖したほか、バチカンの機構改革も行いました。教区報では、教皇フランシスコの主な公文書を紹介します。

■主な公文書

①**回勅『信仰の光』**（2013年6月29日）＝前教皇から引き継ぎ完成させた最初の回勅。相対的な価値観がはびこり、真理が危機に瀕している現代において、人間を孤立した自我から広い交わりへと連れ出す「信仰の光」の再発見を強く促す。

②**使徒的勧告『福音の喜び』**（11月24日）＝「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」をテーマとしたシノドス後の使徒的勧告。自身の殻に閉じこもらず外へと出向き、すべての人に福音を伝えるよう強く促す。「熱意と活力に満ちた宣教の新しい段階」への歩みを望む教皇の思いの力強い表現。

③**使徒的書簡『奉献生活の年にあたって―すべての奉献生活者の皆さんへ』**（2014年11月に21日）

④**大勅書『イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔』**（2015年4月11日）＝いつくしみの特別聖年に向けて公布された大勅書。この聖年の意義を説き、いつくしみの神秘を観想するよう促すとともに、いつくしみ深い御父に倣って、わたしたち一人ひとりが、あらゆる他者にいつくしみをもたらす者となるよう力強く訴える。

⑤**回勅『ラウダート・シ―ともに暮らす家を大切に』**（5月24日）＝環境問題が正面から取り上げられた初の回勅。大気、海洋、河川、土壌の汚染、生物多様性の喪失、森林破壊などを具体的に列挙し、人間活動が他者と全被造物とに与える影響を連帯と正義の観点から考察。開発途上国と将来世代に対し担うべき責任を問う。

⑥**自発教令『寛容な裁判官、主イエス―教会法典の婚姻無効訴訟の改正』**（8月15日）

⑦**「世界代表司教会議設立50周年記念式典における演説」**（10月17日）

⑧**使徒的勧告『愛のよろこび』**（2016年3月19日）＝家庭をテーマとした2度のシノドス（2014、2015年）を受けての使徒的勧告。社会や環境の急激な変化、個人主義の台頭、人間の関係性の希薄化や変貌などにより、危機に瀕している「家庭」と、それを築くための根本である「結婚」。その不変の価値の再確認。

⑨**自発教令『優しい母として』**（6月4日）

⑩**使徒的書簡『あわれみあるかたと、あわれな女』**（11月20日）

⑪**自発教令『マニュム・プリンチピウム』**（2017年9月3日）

⑫**使徒的勧告『喜びに喜べ』**（2018年3月19日）＝主からすべてのキリスト者へと向けられた、聖性への招きの考察。秘跡、犠牲、信心業といった、過去の多くの書で説かれる聖化の手段を反復するのではなく、一人ひとりが日常生活の中で、神と隣人への愛によって歩む聖性の道を説く。

⑬**『教皇から神の民にあてた手紙』**（8月20日）

⑭**使徒憲章『エピスコパリス・コムニオ』**（9月15日）

⑮**使徒的勧告『キリストは生きている』**（2019年3月25日）＝「若者、信仰、そして召命の識別」をテーマとしたシノドス後の使徒的勧告。自己の召命に忠実であるよう青年キリスト者を励ますとともに、彼らに寄り添う立場の司牧者や信徒にも、その成長や活躍の障害や足かせになることのないよう示唆をなす。

⑯**使徒的勧告『愛するアマゾン』**（2020年2月2日）＝アマゾン周辺地域のための特別シノドス後の使徒的勧告。回勅『ラウダート・シ』で繰り返された「あらゆるものはつながっている」というメッセージのもと、アマゾンの民族、文化、経済、自然に関する深刻な脅威を具体的に指摘することで、全人類が受け止めるべき喫緊の課題を示し、預言的役割として教会の社会的参与の必要性を説く。

⑰**『パンデミック後の選択』**（6月）

⑱**回勅『兄弟の皆さん』**（10月3日）＝利己主義による分断が進み、他者の苦しみを顧みない現代世界の闇を具体的に検証し、「よいサマリア人」のたとえを糸口にして、愛がもつ寛容性と普遍性について説き、弱者を切り捨てることのない開かれた世界を生み出すための道筋を希望をもって提言する。

⑲**自発教令の形式による使徒的書簡『スピリトゥス・ドミニ』**（2021年1月10日）

⑳**自発教令の形式による使徒的書簡『アンティクム・ミニステリウム』**（5月10日）

㉑**使徒憲章『パスシテ・グレゲン・デイ』**（5月23日）

㉒**自発教令の形式による使徒的書簡『トラディティオニス・クストデス』**（7月16日）

㉓**自発教令の形式による使徒的書簡『アッセニャーレ・アルクーネ・コンッペテンツェ』**（2022年2月15日）

㉔**使徒憲章『プレディカテ・エバンジェリウム』**（3月19日）

㉕**使徒的書簡『わたしはせつに願っていた』**（6月29日）

㉖**自発教令の形式による使徒的書簡『あなたがたは世の光である』**（改訂版2023年3月25日）

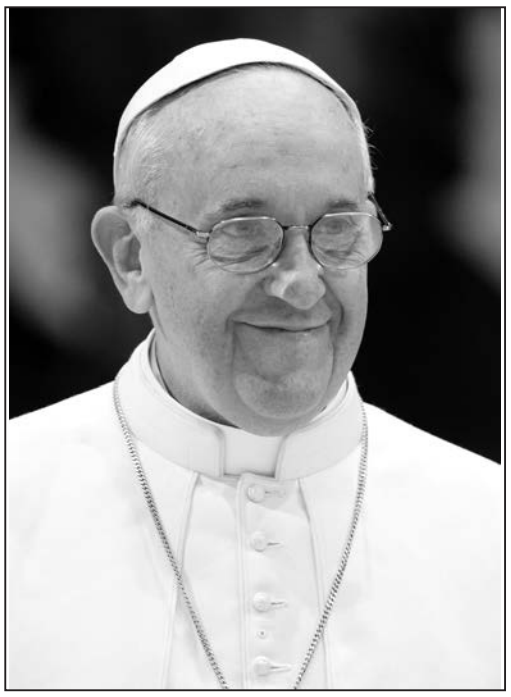
㉗**使徒的勧告『ラウダーテ・デウム―気候危機について』**（10月4日）＝2015年に公布された回勅『ラウダート・シ』を補完する使徒的勧告。今すぐに求められる効果的な対応のために、国際政治の弱点を具体的に指摘し、新たな世界情勢を考慮した多国間主義の再設計を提言するとともに、拘束力あるエネルギー転換の枠組み確立を求める。

㉘**使徒的勧告『信頼の道―聖テレーズ生誕150年を記念して』**（10月15日）

㉙**大勅書『希望は欺かない』**（2024年5月9日）＝2025年の通常聖年公布の大勅書。この聖年を、神の恵みから希望を受け、神へと向かう歩みを強めていただく機会とするとともに、困難にある多くの人に希望をもたらす者となるよう招く。

㉚**回勅『ディレクシット・ノス』**（10月24日）＝同回勅は、「イエス・キリストのみ心の人間的・神的愛」をめぐり伝統的また今日的な考察を行いながら、イエスのみ心に対する真の信心を新たにし、信仰の優しさ、奉仕の喜び、宣教への情熱を忘れないように呼びかける。

㉛**「世界代表司教会議第16回通常総会閉会あいさつ」**（10月26日）



GẦNBÊN

Với sự phát triển của công nghệ thông tin, thế giới như nhỏ bé lại : chỉ cần một cái điện thoại thông minh, tôi có thể nhìn thấy nơi tôi chưa hề đến, có thể nghe lập tức bản nhạc tôi thích, xem những bộ phim mà không cần đến rạp…và có thể nhìn thấy, nghe thấy người tôi muốn gặp, muốn nói chuyện. Người gần người hơn.

Trong tháng 4 tháng 5 vừa qua, không chỉ người Công giáo, nhưng cả thế giới theo dõi những hình ảnh về lễ tang của Đức Giáo Hoàng Phanxico, về Mật nghị Hồng Y, theo từng bước chân của Tân Giáo Hoàng Leo XIV. Rất nhiều người lần đầu tiên được nhìn thấy Roma, được hiểu biết hơn về những nghi thức, nghi lễ, luật lệ…trong Giáo hội Công giáo. Giáo sĩ và giáo dân gần nhau hơn. Giáo dân thấy thương Giáo hội hơn, thương những vị Cha chung và những người có bổn phận hướng dẫn đời sống tâm linh của mình hơn.

Còn các bạn trẻ đang yêu nhau thì hầu như trực tuyến 24/24, trừ những giờ khắc khi làm việc trong công ty không được sử dụng đến. Bạn ấy gọi video cho người yêu và để đấy, rồi đi nấu ăn, đi giặt giũ, chơi game, có khi dùng điện thoại khác để gọi cho gia đình, để làm việc, nhưng nhất định không tắt video với người yêu. Đi ngủ cũng vẫn để online… Họ thấy gần nhau chưa đủ, nhưng muốn ở ngay bên người yêu, nhìn thấy người yêu nhiều nhất có thể.

Tôi cũng có con oppo. Tôi cũng sử dụng mạng và những tính năng tiện lợi của nó. Tôi cũng đang yêu và được yêu, nhưng tôi thấy mình thua các bạn trẻ xa thật xa : Tôi chưa có khả năng nối kết với người tôi yêu 24/24, tôi không muốn cho người ấy biết và nhìn thấy góc khuất của tôi, tôi chưa có được một sự nhớ nhung da diết, mong mỏi đến mức khó chịu khi không được gặp người ấy, tôi cũng không háo hức mong mỏi mau đến giờ đi gặp người ấy…dù rằng người ấy yêu tôi bằng một tình yêu rất lớn, có thể bao trùm cả vũ trụ, người ấy hiểu hết, biết hết mọi sự trong ngoài của tôi…bởi vì Người ấy đã tạo dựng nên tôi và đã dám chết vì tôi.

Tôi hổ thẹn với chính mình và xấu hổ khi đến gặp Người trong những giờ kinh, giờ nguyện gẫm, bởi tôi đọc và nghe Lời của Người không như đọc thư tình. Tôi đi dự Tiệc Thánh do Người dọn cho, được kết hợp với Người trong Bí tích Thánh Thể, nhưng tâm trí tôi không hoàn toàn ở bên Người. Người hiện diện trong thiên nhiên, trong những người tôi gặp gỡ hằng ngày…nhưng tôi không thấy.

Tháng 6, Giáo hội dạy tôi kính Thánh Tâm Chúa Giêsu: một trái tim yêu đến nỗi không tiếc gì.

Mong rằng tôi và bạn được Người dạy cho biết yêu Người nhiều hơn, nồng nàn và thắm thiết hơn. Yêu như Người đã yêu.Và mong rằng tình yêu ấy sẽ được thể hiện thật cụ thể và sống động trong từng ngày sống của bạn và tôi.

Sr. Maria Goretti Hoàng Oanh SPP.

Dòng Chúa Quan Phòng Portieux.

信仰の種をまき続けて60年

レデンプトール宣教修道女会が来日と誓願宣立感謝ミサ

ゴールデンウィーク中の5月6日（火）、レデンプトール宣教修道女会の来日60年と同会所属のモニカ・エルハルド・ワルトラウド修道女の誓願宣立60年を記念するミサが谷山教会であった。

午前11時からのミサには80人ほどの信者が駆けつけ、中野司教と7人の司祭たちでささげられたミサで、レデンプトール宣教修道女会とワルトラウド修道女のこれまでの働きに感謝し、これからも活動が充実するよう祈りをささげた。

テオドラ総長を囲んだ会員たち

またこの日のミサには、ドイツの本部修道院から駆けつけた同修道女会のテオドラ・シュラク総長の姿もあった。

ミサでは、エフェソの信徒への手紙（3章14～21）とヨハネ福音書（15章9～17）が朗読された。

福音朗読後、説教に立った中野司教は、男子会を含む男女レデンプトール会の鹿児島での功績について、司教の幼少時のこと、ローマ留学時のことなど個人的な逸話を交えながら紹介し「同会の宣教師、修道者たちとのつながりが私を育ててくれた」と感謝した。

またこの日の朗読箇所をレデンプトール宣教修道女会の姉妹たちが選んだことにも触れ、「この2つの朗読箇所には信仰の核心と言えるものが記されている。私たちはキリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどのものであるかを理解しなければならない」とした。そして「問題は私たちがそのキリストの愛を理解できているかどうかだ。私たちはキリストの愛を知り、それを周りの人に伝えなければならない。伝えることで軋轢があるかもしれない。それでもレデンプトール宣教修道女会のシスターたちが60年もの間続けてきたように、信仰の種をまき続けていこう」とメッセージを送った。

司教の説教のあとには、エルハルド・ワルトラウド修道女が「神の国の実現のために清貧、従順、貞潔を守る」という誓願を更新し、その後、同修道女と所属する修道会が務めを果たすことができるよう、また帰天されたフランシスコ教皇、世界平和のために共同祈願がなされた。

ミサの終わりには、教皇フランシスコの生前に教区から申請された教皇祝福状がエルハルド・ワルトラウド修道女に手渡された。

ミサ後は教会ホールで交流のひとときがあり、喜びに満たされた。

レデンプトール宣教修道女会60年の歩み

1957年、レデンプトール会ミュンヘン管区によって設立された働く修道女の共同体。日本では1965年5月から鹿児島教区で働いている。最初に日本に派遣されたのはカタリナ、スザンナ、モニカの3人の修道女。3人は1965年4月17日、ガルスの修道院での派遣式に臨み、日本へと出発した。東京に着いたのは5月2日。最終目的地の鹿児島に到着したのは5月6日のことだった。

それから日本語を谷山教会の信徒の力を借りて学び、1967年9月に日本人の志願者2人（シスター下川、シスター重）を迎えるに至った。その後女子寮の運営に乗り出し、更に4人の修道女が加わり、それぞれのタレントで看護士、幼稚園教諭、学校、教会で働きながら聖アルフォンソの精神を伝え続けて来ている。

ご寄付のお願い　NPO法人やくしま未来工房

大阪・関西万博イタリア・バチカン館でシンポジウム「イタリア人宣教師シドッティと日本ー数奇な生涯の謎に迫る」（9月29日17時）とパネル展を開催する計画ですが、資金繰りに苦慮しております。ご寄付をいただけますと幸いです。

振込先：鹿児島銀行　屋久島支店　普通預金 3025114
：ゆうちょ銀行 記号番号 01700－5－173571
口座名：特定非営利活動法人　やくしま未来工房

イグナチオの霊操㉔

紫原教会主任司祭　貴島丈弥

霊の識別（6）
第二週の悪霊の識別

第二週から霊操者は、「イグナチオの観想」に入ります。

「イグナチオの観想」は、いわゆる「観想」とは異なり、聖書本文の中に、想像力を働かせて、自分自身を登場させ、イエス様やマリア様、天の父、聖霊、ヨセフ様や他の登場人物と直接の対話をしていくというものです。

第一週の罪の黙想で、自分の罪により深く向き合い強く絶望した人ほど、より深い「観想」に入ることができます。

第二週から、霊魂は清めの段階から照らしの段階へ進みますが、それに伴って、悪霊の取る手法も変化していきます。

第二週の悪霊は「光の天使に変装する悪天使」と描かれています。

敵は良い仮面を被って人に近づき、一見よいと思われる考えによって誘惑し、最終的に霊魂を堕落させ思いのままにするという手法をとるようになります。エゼキエルの預言の28章にルシファーが表現された箇所があるとされています。

12節から14節に「お前はあるべき姿を印章としたものであり　知恵に満ち、美しさの極みである。お前は神の園であるエデンにいた。あらゆる宝石がお前を包んでいた…わたしはお前を翼を広げて覆うケルブとして造った」と描かれており、17節には「お前の心は美しさのゆえに高慢となり栄華のゆえに知恵を堕落させた」と書かれています。

また、イザヤの預言の14章にも描かれているとされています。

12節から15節に「ああ、お前は天から落ちた明けの明星、曙の子よ。お前は地に投げ落とされた　もろもろの国を倒した者よ。かつて、お前は心に思った。『わたしは天に上り　王座を神の星よりも高く据え神々の集う北の果ての山に座し雲の頂に登って　いと高き者のようになろう』と。しかし、お前は陰府に落とされた　墓穴の底に。」と描かれています。

ルシファーとは、「光を運ぶもの」とか「光をもたらすもの」という意味を持ち、神さまからそのように創造されたのですが、傲慢さのゆえに神に背き地に落とされたとされています。

霊操の第二週、そしてそれ以降では、この美しい仮面を被った敵からの誘惑を見分けなければいけません。

参考文献
ペドロ・アルペ、キリストの道　第四巻　第二週
生活の改善

会と催し　6月

1日（日）主の昇天
▼教区修道女連盟総会と研修会・教区本部・9時
2日（月）3教区司祭合同黙想会・名瀬聖心教会・～6日まで
▼松森孝郎神父命日（2017年）
3日（火）みことばを祈る集い・ザビエル教会・10時
8日（日）聖霊降臨の主日
10日（火）司祭評議会・教区本部・14時
11日（水）中野アカデミー・教区本部・13時30分
▼フリチェル神父命日（2016年）
13日（金）泉浩二神父、鄭法鍾神父霊名（聖アントニオ）
14日（土）聖書の分かち合い・教区本部・14時
▼青年会・教区本部・18時
15日（日）三位一体の主日
▼大熊教会堅信式・9時
▼奄美の宣教司牧を考える会
17日（火）奄美司祭会
20日（金）重久知司助祭命日（2024年）
22日（日）キリストの聖体
▼オリーブの会・教区本部・14時
24日（火）洗礼者聖ヨハネの誕生
▼小川靖忠神父霊名（洗礼者聖ヨハネ）
▼牧師神父の会・教区本部・14時
25日（水）中野アカデミー・教区本部・13時30分
27日（金）イエスのみ心
28日（土）カウンセリング講座開講・教区本部
▼聖書の分かち合い・教区本部・14時
29日（日）聖ペトロ　聖パウロ使徒
▼聖ペトロ使徒座への献金

教皇は毎年、世界各地を司牧訪問します。そして、人々の苦しみや悩みを聞き、優しい笑顔で力づけ、数々の援助を与えます。キリストの代理者、教会の最高牧者である教皇は、祈りと具体的な援助を通して全世界の人々にいつも寄り添っているのです。この教皇に心を合わせて、わたしたちも世界中の苦しんでいる人々のために祈りと献金をささげます。教皇のこうした活動のために充てられる聖ペトロ使徒座への献金は、8世紀ごろイギリスで始まった、大人も子どももいちばん小さな通貨の単位である1ペニーを毎年教皇に献金する運動がもとになって世界中に広まったものです。

▼永山幸弘神父、桃薗淳一郎助祭霊名（聖ペトロ）
▼小隈憲士神父、ファン・ミン・アン神父、貴島丈弥神父、小島芳武助祭霊名（聖パウロ）

【司教日程】1日教区修道女連盟、2～6日三教区司祭合同黙想会（奄美大島）、9日カトリック大隅学園、10日司祭評議会、11日中野アカデミー、13日日韓司教交流、15日大熊教会堅信式及び奄美の宣教司牧を考える会、16～20日定例司教総会、22～23日平和記念式典（那覇教区）、25日中野アカデミー

祈りの意向
【祈祷の使徒会】
教　皇　世界に思いやりの心を育む
日本の教会　難民移動移住者

未来を担う若者の活動

WYDを見据えて、また信仰を深める旅で

救いの十字架と聖マリアのイコンで祈る

ワールドユースデイ・ソウル大会（2027年）のシンボルである「救いの十字架と聖マリアのイコン」が今年4月27日～5月11日まで日本国内（3教会管区）を巡回した。

長崎管区では4月29日（火・祝）の午後、旧福岡カトリック神学院を会場に、管区の青年を中心とした祈りの集いが開催された。

午後1時半から始まった行事の前半部分では青年たちが分担して十字架とイコンを運び、行列しながら歌と祈りをささげた。後半は長崎の中村倫明大司教主司式で、福岡と大分の司教及び青年にかかわる司祭たちの共同司式で野外ミサがささげられ、午後4時半に終了した。

以下は鹿児島から参加した青年による感想文。

丸田聖人（玉里教会）

WYDの十字架とイコンを中心とした今回の行事は自分の信仰心をより一層強く深めることができた一日でした。

イコンを背負って回った時の重みや、十字架に触れて十字架を抱きしめた時に感じた温もり、それらはすべて神様が私たちの罪を背負ってくださった重みであり、神様にしがみついたときの温もりだと思います。

私たちは嫌なことつらいこと、悲しいこと、それらから逃げたくなるものですが、神様はいつも私たちのそばで私たちの十字架をともに背負ってくださる方なのです。だからこそ私たちも十字架としかり向き合っていくことが大切であると自分の体で感じることができました。このことを他の教区の青年の皆様と協力し、分かち合えたこと、本当にうれしかったです。

信仰を深める旅

引率者　押川尚樹

3月26日（水）から28日（金）まで2泊3日で、は佐世保市にある大崎教会（長崎教区）に宿泊させて頂いて巡礼しました。

指導の貴島丈弥神父様（紫原教会）のもと奄美から大人2人、鹿児島から高校生1人、専門学校生1人、長崎で学んでいる大学生1人も加わり、総勢6人での巡礼団でした。

今回の巡礼のテーマは「出会い」で、これからの教会、信仰を守って伝えていく若者のため、またその若者たちへ信仰を繋いでいく役目のある者たちのため、そして教会から離れていて今回の巡礼でイエス様への恵み「お帰りなさい」を頂いた者のためでした。

そんなそれぞれの思いの中で、大崎教会にお世話になりました。大崎教会は素敵な家族のような共同体の教会です。そして町中にイエス様の香りを漂わせているこの家・教会から始まった素敵な巡礼でした。そして今回、訪問した教会、出会った人々との大切な時間を奄美に持ち帰りました。

巡礼を終えて「エマオの旅人のように熱く伝える人になりたい」「一緒にお泊りくださいと言って、いつもイエス様とともにいたい」そう感じる聖年の特別な旅でした。

スタッフ初挑戦

榮　桃花

私は2回目の長崎巡礼に参加させていただきました。初めての時と比べても変わらない人々の温かさであったり、新しい人たちとの出会い、新しい発見などが多くの事を学ぶことができました。

3日間という短い期間でしたがとても充実した巡礼になり、神様のお恵みを感じることもできました。貴重な経験をさせていただいた感謝の気持ちを忘れず、今後自分の将来に向かって頑張りたいと思います。

初参加でした

高校3年　中田　麗

今回初めて巡礼に参加させていただき、長崎のいろいろな教会を回ることができました。

同じ教会でも建物の形や中の作りなどまったく違っていて、建物一つひとつに意味が込められて建造されていることも知り、楽しかったけれどとても勉強にもなる、とてもいい経験をすることができて本当に良かったです。また、機会があったら別の教会も見たいと思いました。

第37回カウンセリング講座スケジュール

回	月	日	曜	講　師	内　容
	6	21	土	事務局	14時・17時　説明会
1	6	28	土	大坪治彦	カウンセリングの基礎知識Ⅰ
2	7	5	土	大坪治彦	カウンセリングの基礎知識Ⅱ
3	7	12	土	中野裕明司教	共に歩むためにⅠ
4	7	19	土	今林俊一	家族の人間関係
5	8	2	土	今林俊一	青少年の心理
6	8	30	土	Sr.澤ヤエ子	人権についてⅠ（公開講座）
7	9	6	土	山口寛子	人権についてⅡ（公開講座）
8	9	13	土	有倉巳幸	職場の人間関係
9	9	20	土	大坪治彦	よい聴き手となるためにⅠ
10	10	4	土	大坪治彦	よい聴き手となるためにⅡ
11	10	11	土	大坪治彦	よい聴き手となるためにⅢ
12	10	18	土	大坪治彦	よい聴き手となるためにⅣ
13	11	8	土	事務局	電話カウンセリングの実際
14	11	15	土	中野裕明司教	共に歩むためにⅡ　修了証認定証授与
15	11	22	土	事務局	新人オリエンテーション

要　理

名前を付けるということ②

悩みに悩んで一週間後、名前がやっと決まる不思議と何とも表現できないうれしい気持ちが心に沸き起こり、子犬が今まで以上にかわいく思えたのです。そして自分が決めた名前を誇らしげに父親に伝えました。

すると父親は私に「名前の由来を説明してみろ」と言ったので、私は犬の名前に込めたいろいろな気持ちを話しました。

うなずきながら話を聞いていた父親は私が話し終わると、ゆっくりと「いいか…たった10年くらいしか生きない動物の名前でもそれほど悩んで考えてつけるんだ。ましてや人間の名前だったら…？」と私に問いかけたのです。

その言葉を聞いて思わずハッとしました。そして自分が少し恥ずかしく思えました。

そのときにはっきりと気付いたのです。名前というのは両親やいろいろな人の愛や思いが込められているものだ！ということが…。

因みに私がつけた犬の名は「成（なる）」でした。

成人式の日に連れてきたし、成功の「成」や成就を意味する一語ですし、縁起よさそうだし、犬も覚えやすそうだから…このような理由からでした。

もしかしたら皆さんは「こんな名前だったら良かったのに…」と思ったことがあるかもしれません。しかし自分の名前は愛の表現であると言えます。だからこそ両親や誰かに名前を呼ばれたら、たとえ叱られるときであっても「自分は愛されている」と思ってください。

また誰かの名前を呼ぶときも同じように「この人も愛されている」と思ってください。きっとそれがイエス様が教えてくださった最も大切な掟である神への愛と隣人愛の実践につながることでしょう。